

### 本を片手に



『黄金の羅針盤』  
フィリップ・プルマン

空から「天使の梯子」が降りてきたら、パラレルワールドへ冒険の旅に出ませんか。ガイドを兼ねる相棒は12歳の少女ライラです。

『黄金の羅針盤』は、イギリスの児童文学者フィリップ・プルマンの三部作『ライラの冒険』の第一部です。プルマンはこの作品でカーネギー賞とガーディアン賞を受賞しています。12歳の少女が案内役、児童文学、パラレルワールド、？がいくつも浮かんできましたか。でも、この作品は大人も、いえ大人だからこそ楽しめると思います。

『ライラの冒険』の世界は、マジステリウムという国際的な神権政治に支配されています。人間は、肉体と魂が分かち難い関係にあり、魂は守護精霊・ダイヤモンドという形で存在します。思春期以前は姿形を徐々に変化させられますが、それ以後は一つの生物に落ち着きます。ライラのダイモンはパンタライモンという名で、まだいろいろに変化します。

『黄金の羅針盤』は、ライラが「コブラー」という子供を誘拐する組織から幼馴染みを救出する冒険物語です。物語の始まりのライラは11歳、オックスフォードの学寮で暮らす快活な少女です。彼女には、謎の素粒子「ダスト」を調査研究している伯父さんがいます。彼は、ダストがパラレルワールド（私達の世界のことです）で生まれてこちらの世界に降ってくることを考えており、北極光に穴を開けてそこへ行くこととします。それがコブラーとどう関係するのか……。

ライラは幼なじみの失踪という事件で、突然ダストを巡る大人の事情に巻き込まれてゆきます。冒険に旅立つ日に学寮長からアシオメーター（真理計）は、ライラをどう導くのか。

美しい社交界の名士、船上生活の民王座を失った鎧熊、気球乗り、魔女一族など魅力的な人々が登場します。そして彼らから、ダストとは、目的と手段とは、神と異端とは、という宿題が出されるのです。それがこの本の醍醐味です。

『天使の梯子』はパラレルワールドへ続いているのかもしれない。ライラの冒険も続きます。

#### 新潮文庫

黄金の羅針盤 ライラの冒険 上下巻  
神秘の短剣 ライラの冒険II 上下巻  
琥珀の望遠鏡 ライラの冒険III 上下巻  
(和)

# 文学の杜

仙台文学館  
友の会会報

第58号

平成30年11月30日発行

仙台文学館友の会(仙台文学館内)

〒981-0902

仙台市青葉区北根2丁目7の1

電話 022(271)3020

仙台文学館のホームページ

http://www.sendai-lit.jp/

## 第59回 晩翠わかば賞・あおば賞

晩翠わかば賞・伊藤利音奈さん(登米市)  
晩翠あおば賞・小川 倫花さん(仙台市)

仙台が生んだ詩人土井晩翠を顕彰するための第59回晩翠わかば賞あおば賞の贈呈式が、10月14日、仙台文学館で行なわれた。

晩翠わかば賞は、登米市立加賀野小学校2年伊藤利音奈さんの「先生のことば」。晩翠あおば賞は、仙台市立高砂中学校2年小川倫花さんの「おまもり」に決まった。応募作品は東北地方の小・中学生から、総数727編。ほかに

優秀賞に選ばれたのは以下のとおり。晩翠わかば賞優秀賞は、宮城県登米市・伊藤飛翔さん、仙台市・鈴木藤登さん、仙台市・菊田想さん。晩翠あおば賞優秀賞は、仙台市・秋山泰輝さん、仙台市・小林ちひろさん。

### 晩翠忌記念行事

## 「荒城の月」市民大合唱

### 日本の心をひびかせて

10月19日は郷土が生んだ詩人土井晩翠が亡くなった日である。晩翠忌のこの日、記念行事として「荒城の月」市民大合唱が仙台文学館エントランスロビーで開催された。今年から会場を仙台城址から文学館に移して行うことになった。

2部構成になっており第一部は仙台市民文化事業団理事長大越裕光氏の挨拶があった。片平丁小学校6年の代表が土井晩翠の遺影の前に献花した。それから6年生児童全員76名が声高らかにそしてしっかりと「荒城の月」を歌い上げた。第二部は公募による参加のコーラスと演奏で、8団体がエントリー。混声合唱団、男声合唱団、合唱団、童謡愛好会とそれぞれが「荒城の月」の他に1、2の唱歌や童謡を歌った。演奏の団体はオカリナ、草笛、篠笛と続いた。ステージでの歌や演奏に合わせて聞いている方々もリズムに合わせて体を揺らす。一体になっているのが分かる。曲目も「里の秋」「ふるさと」「春のあしおと」など聞き覚え

## 風と歩こう

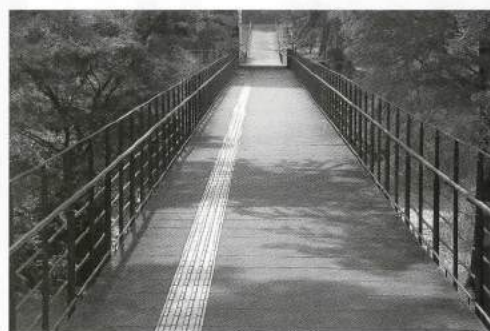


Photo by Ryuji Sasaki

文学館の門を入って間もなく、「館内入口」と書かれた緑色の標識が見えてくる。ここを右に折れると、水辺にかかるコンクリートの橋の上に出る。池の水が空と雲を映し込み、頭上には白いシンブルな文学館の建物もうひとつの橋のように横たわる。

池にかかるこの橋は100メートルほど先の地上で、館の南側に広がる庭への緩やかな上り坂に変わる。橋とその奥につながる道のひと続きのいさぎよさ。すっきりとした飾らない素朴さが周りの緑に包まれて美しい。歩いてみないかといさぎやう風情があり、つい立ち止まって見惚れてしまう。

東山魁夷がまつすくなくひとすじの道を描いたのは1950年である。それから50年後に文学館のこの橋と道を設計した人は、あの絵を頭に思い浮かべたのだっただろうか。橋を渡り始める時、そして橋と道のひと続きを眺める時、いつもそのことを思う。

車で一気に坂を上ってしまおうと決して出せない、静かで端正な風景である。(佐)

### 編集後記

仙台文学館友の会会報「文学の杜」第58号をお届けします。

▽芭蕉の「奥の細道」をじっくり読んだ。始めから終わりまでこんなに丁寧に読んだのはこれまでになかった。家人の本棚に数十冊の解説書や研究本、写真紀行が並んであった。処分しないで良かった。ずいぶん多くの方々も芭蕉の歩いた道歩いている。私も天気の良い日に塩釜神社、山寺をぶらりと散歩した。(一)  
▽終日雨天の日に夫婦連れだつて遠くから来客があった。悪天候は「日頃の心が悪いせい」と冗談のつもりでメールした後で、それは迎える方ではなく出かけてくる方が言うことだと気付いた。謝りのメールを送ったが、すぐは返信がなく落ち込んだ数十分だった。「食事まで返事が遅れました。ドンマイ」と着信がきたときは、ほっと胸をなでおろした。(近)

▽光が晩秋の色になってきた。でも今年少し薄汚いような気がする。樗も銀杏も、枯れて散った葉があるせいだろうか。そういえば「黄なる葉の日含みやすき」とか、「桐一葉日当たりながら」とか、吹くことが少なかった。猛暑のせいにしたら「みんな私が悪いのよ」と夏がつむじを曲げるかもしれない。季節を楽しむ感覚にも磨きをかけなくては。(和)  
▽楽器店のホールで小さな演奏会を聴いた。チェロとコントラバス、若い奏者二人による低音のストリングスだ。ポピュラーな曲が多く楽しい。饒舌なコントラバス奏者と無口なチェロ奏者のやり取りもほほえましく、百人ほどの会場に温かな笑いが揺れる。雨の日なんて素敵なコンサート。(佐)

## 文友一滴

数年前森下典子著エッセー「日日是好日」―「お茶」がおしえてくれた15のしあわせ―を読んだ。お茶の教室にはいるきっかけや入ったからの失敗談。同じ事の繰り返しの中の腑に落ちない疑問、それが回を重ねていく毎に身につけて行く。形からはいりそのうちに心が入る。

面白いからと茶道教室に持参し仲間内でまわし読みをしたことがあった。「失敗したところなどまさに私よ」とお互いに思いを重ねながら読んだのは懐かしい。それが映画化されるとは。物語でもないこのエッセーがどのように表現されるのだろうか。興味津々に公開日待った。

お茶の教室は表千家の武田先生、演じるのが樹木希林。著者典子役には黒木華で従妹の道子が多部未華子。亡くなったばかりの樹木希林の登場にウオーツという感じがした。部屋に入つて静かに語る武田先生の声の裏側の息遣いが難儀そうに聞こえる。病気が闘いながら演じているという先入観が映画の進行をわずかに邪魔した。

友の会随想

文学を読む醍醐味は、私の場合は書店へ行くことから始まる。ここで本と出会い、さらにはもつと多くの事との出会い、気付きにも発展していく。特に古書店のあの独りの空間が何か名状し難い気分になさてくれる。



文学を読む醍醐味

友の会会員 大泉 智博

私はほとんど外国の文学しか読まないでお目当ては、やはり「世界文学」である。古書店の文学コーナーには、玉葱色と化したドストエフスキー、トルストイ、ジツドラが腰掛けられている。本を開いて作者の写真をみる。そこに写し出された貌はとても重い。パラパラと本をめくって見る。話の内容も重そうである。もちろん全集がとて「重

い」の言うまでもない。ここでモリエールの言葉を。「円満な理性は何事によらず、極端を避ける」とある。哲学者のパスカルにも似たような言葉がある。「中間から離れることは人間から離れること、人間の魂の偉大さはいかにして中間にとどまるかを知るところによる」とある。極端というのは、主張が真逆であつても、根本的な部分では似通っているよう

に思う。真の意味での中間こそ寛容、秩序、自由といったものを生むのだろう。「円満な理性」というものを持てれば、目が見えなくなったり耳が聴こえなくなるようなことは少なくなるはずだ。善い言葉にたくさん触れることで自分自身が変われる、他者との関係性や様々な問題に対しても違った目で見られるということがわずかながらでもできるかもしれない。文学を読む醍醐味で最大のものは「私」というものが根本的な意味で碎かれることになると思う。古い私から新しい私になるようなものである。私はまだまだ読書歴が短いのでこのような本には出会えていない。ぜひとも出会いたいものである。

企画展「資料が伝える物語」を見る

寄贈された文学資料をみて私が真っ先に思うことは、資料を所蔵していた人と文学者の関係と、寄贈するまで大切に保管した情熱です。今回は仙台とつながりのある文学者にスポットを当てて構成されているので、寄贈者も県内に住んでいた人が多かったように思います。入手のいきさつが短く書かれてあるのを読むうちに、文学者と寄贈者の交わりはこうだったろうか、ああだったろうかと想像が膨らむのが楽しい時間でした。

明治時代に仙台で活躍した画家布施淡と、後に妻となる加藤豊世が交わした往復書簡はその量に圧倒されます。手書き文に絵入りの密度の濃いラブレター。なんでもメールで済ませる若者が見たら、どんな感想を持つのでしょうか。北杜夫が学生時代に下宿していた場所を示した地図の前で、一心に眺めていた七十年代の女性に後からやってきた若い女性が声をかけ話が始めると、吸い寄せられるように男性が加わり、地図の前はちよつとした座談会の様相を呈しています。当時の仙台の町の写真などをめぐって話につきまといよう、見ず知らずの見学者どうしてこんなに熱く語れるの

だと楽しくなりました。向田邦子の生原稿を見て思い出したのには、以前雑誌で見た向田邦子の姿。旅先のホテルでスツールに腰かけて背を丸め、一心に原稿を書いている小さな写真があつて、俯いた姿が印象に残りました。展示されていた原稿は細めに流れるような字で、膝の上で急いで書かれたみたい、少し薄いように見えました。文学者の書簡や掛け軸、色紙などは勿論のこと、土井晩翠ゆかりの女性に贈られた羽織と帯は会場内に艶やかさを添えていて、しばらく目が離せませんでした。第2期の会期は2018年12月8日(土)から2019年3月31日(日)まで。(近)

16 黒光と塩瀬饅頭

明治8年、広瀬河畔の士族屋敷に生まれた星良は子どもの頃から、非凡な才能を持っていたようで押川方義により12歳で受洗。いったんは宮城女学校に進むが、上京し向学心と芸術による情熱で激動の時代を駆け抜けた。明治女学校で巖本善治から焔めく才能を包めという意味で「黒光」という名を与えられたというから、どれほどの才女だったことか。

相馬黒光夫妻を軸とした白井吉見の大

河小説「安曇野」は萩原礫山など新宿中村屋に入入りする芸術家たちを生き生きと描き、おもしろく読んだ。黒光を身近な人と感じたのは、私の本「今は昔 明石屋物語」(あきは書館)にも書いたことだが、母の実家に伝わる塩瀬饅頭について調べていたときのことだ。仙台藩の御用菓子司だった明石屋は明治維新後、庶民相手の商いもするようになっていた。塩瀬饅頭は高級菓子として白い上品な皮とねっとりした餡のうまさ

に売れたという話が残っている。広瀬川大橋に近い大町角にあった店先に、黒光が尋ねてきたことがあつた。塩瀬饅頭を求めながらその製法を知りたかつたが、秘伝なので、と教えはしなかつたという。中村屋のあんまんの黒くてねっとりとした餡の味は似ている、と伯母が教えてくれた。中村屋のあんまんに幻饅頭の味を重ね、今も私の好物だ。昨夏、久しぶりで新宿中村屋に立ち寄つたが、中村屋サロン美術館が併設されていて、相馬黒光を偲びながら時を過ごした。(渡辺仁子)

17 白蓮の歌碑

一雨が降らないといいなあーと思いつつ8月24日私達は岩手の気仙郡住田町へ車を走らせた。住田町は、わが友が高校時代まで住んでいた文化の香り高い町で、一度は訪ねてみたいと思つていて、今年ようやく叶つたのである。折しも台風20号が日本海へ抜けつつある頃である。はじめに「住田町民俗資料館」に入り、白蓮の弟子であった佐藤霊峰の歌の展示室をのぞいた。時間の許す限り、霊峰直筆による短冊や色紙の歌に見入った。「心よき疲れおほへてうす暗き夕餉の膳に向くもう

れしき」「北上の流れをとほく見はるかし賢治が詩碑は陽に映えて立つ」次にむかつたのは、白蓮の歌碑の建つ滝観洞。車を停め、小川に沿って歩いて行く、赤い太鼓橋が見えて来た。その橋の渡り尽きた所が滝観洞の入り口である。路面は大理石で奥まで続き、八百メートルほど進むと滝が見えるという。入洞の装備ではなかつたので引き返し、歌碑を読んだ。白蓮がこの滝を見て詠んだ一首が直筆のまま黒い自然石に刻まれていた。「神代よりかくしおきけむ滝の瀬の世にあらはるときこそ来つれ」この滝観洞はその後、この歌のとおり、

私と郷土と文学



「私と郷土と文学」の原稿募集約600字で会員のみなさまの原稿を募集します。文学館友の会事務局まで、お送りください。(相澤寿美子)

第37回読書会

逆臣、明智光秀の心の内をさぐる 「逆軍の旗」藤沢周平

日向守 明智光秀は、備中路に遠征している秀吉援護のための出陣を前にして、連歌の会に出席している。連歌師紹巴の目にはその日の光秀の行動は異様に映っていた。主君織田信長を京都本能寺に撃つたものの、やがて秀吉との戦いに敗れて歴史の舞台から葬られる光秀だが、彼は本能寺襲撃を決意した時から、すでに己のその後を暗く見詰めていたのであつた。なぜ彼は主君殺しに至ったのか。合戦の生々しさも残酷さも描かれることなく、謎に包まれる戦国武将明智光秀の心の内、静かに明かされてゆく。「全てに裏切られる光秀の滅びの物語」とみる人もいれば、「もし彼が秀吉に勝っていたら」と戦国の歴史の動きに関心を持つ人もいる。「彼は武人ではなく文人」「内に激しいものを持つ人」「政治力はなかった」との人物評も面白い。歴史的史実を材料にしてはいるが、あくまでも小説である。作者の想像によって書かれたもの、あるいは書かれなかったものを読み手は楽しむのである。10月10日、新会員を迎えて11名出席。(佐)

文友の部屋

※映画「オーケストラ」(2009年・フランス)は、寄せ集めの楽団員が、ロシアのポリシヨイオーケストラになりすましてパリ公演を行うという、有り得ない発想で始まる。ドタバタの娯楽作品なのだが、深い所で胸を打つ。そこにはこの楽団の秘められた辛い物語があつたからである。何度見ても、圧巻のエンディング「バイオリン協奏曲ニ長調」の演奏に涙が滲む。(N・S)

「文友の部屋」の原稿募集

1500字程度で、会員のみなさまの声を寄せてください。おススメの文芸作品や、映画・演劇などを見た感想などジャンルは問いません。イニシャルでの投稿も可です。

恒例の年賀状展

本年度も、文学館主催、友の会共催事業「新春ロビー展100万人の年賀状展」を開催します。今年で第17回を迎える恒例の企画となりました。今年のテーマ部門は「あなたの心に残る漫画・アニメ」です。自由部門では、好きな作家や作品名、作品の二節、自作の詩や俳句などを添えた年賀状作品を募集し、館内でご紹介いたします。多くの会員のみなさんに、年賀状作品をお寄せいただき、ご参加いただきますよう、お願いいたします。

会員情報コーナー

▽境数樹さんが代表を務めるみちのく権草子の会は「みちのく権草子第19集」を出版しました。